

「天空高き」



平成23年4月19日

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

この度東日本大震災により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。さらに、犠牲になられた方々のご遺族の皆様に、謹んでお悔やみ申し上げます。

そして、1日も早い復興をお祈り申し上げます。

中・高対面式で

中・高の対面式で2つのこととお話しました。

1つ目は東日本の被災者の惨状を思うにつけても、当たり前なのが当たり前出来る、この現状に感謝し、これからの人生を切り開いていくための基礎学力と豊かな人間性と社会性を身に付けてもらいたいということ。そのための基盤となる「時を守り、場を清め、礼を正す」ことをお願いしました。頭髪、服装を整え、毎日元気に学校に登校して、明るい挨拶返事をする、掃除を一生懸命にする、ということになります。

もう一つは、「いじめ」についてでした。人が人を傷つけるということは、どんな時でも絶対に許されない、我々も絶対に許さない、ということです。

縁あって高水学園の生徒として一緒に学校生活をおくっていきます。「先生たちからは忙しいけれど楽しい」、「生徒たちからは厳しいけれど楽しい」といわれる学校にしたいと強く願っています。お互いに思いやりの心と助け合う精神で、114年目の高水学園に新たな歴史を創っていきましょう。

一滴の碑

図書館の横に『一滴の碑』があります。全理事長で校長先生でもありました、宮川澳男先生の「一滴の水が大海を潤すように、高水学園を卒業後は、一人ひとりが社会に貢献できる立派な人間になってもらいたい」という、熱い願いが込められています。



生きるということは、誰かに借りをつくること。生きてゆくということは、その借りを返してゆくこと。 永 六輔



編集手帳

避難所になった岩手県大槌町の高校を取材した本紙記者が、最初に見たのは校内でボランティア活動に精を出す約30人の生徒たちの笑顔だった。炊き出し、トイレ用の水くみ、駐車場の交通整理◆このうち10人は家族の行方がわからない。自身が大津波にのまれ、廃材につきまわり生き延びた生徒もいた。「昼間は気丈に振る舞っていますが」。副校長は硬い表情で言ったそうである。「夜、1人になると、真っ暗な校内で突然泣き出すんです」◆闇。嗚咽。その光景を思い浮かべると胸が痛む。せめて福島県郡山市出身の俳優西田敏行さんが、本紙に寄せた被災地への「声援」の言葉を届けたい。「どうか1人の時間を作って、思い切り泣いてください」◆「涙が乾いた後に新たな道が見えてくると私は信じています。皆さんが腹の底からの笑顔を取り戻せるように私も応援を続けていきます」。今必要なのは、子どもたちの心のケアであろう◆被災地の小中学校に、千人以上の学校カウンセラーを配置する準備が進められている。寄り添って、話を聞いてやってほしい。涙が悲しみを少しでも洗い流せばいい。

2011. 4. 17

17日(日)左記のような読売新聞「編集手帳」に、避難所でボランティア活動をしている高校生の記事が掲載されていました。

昼間は活発に活動していても、夜一人になると、誰だってさみしくなります。ましてや大変な心の傷を負っている彼らのそれは、我々の理解を超えています。ただ、「誰かがいてくれる」「誰かが見守っていてくれる」というだけでも随分違うと思います。彼らが徐々に視界を広げ、周りが見えてくるよう

になると、体験を分かち合うことが、とても大切になると思います。彼らに、99歳でデビューされた詩人、柴田トヨさんの『^{せがれ}倅にI』をおくりたいと思います。

何か/つれえことがあったら/母ちゃんを 思い出せ/ 誰かに/あたっちゃあ だめだ/あとで自分が/嫌になる/ ほら 見てみなせ/窓辺に/日がさしてきたよ/鳥が ^な啼いてるよ/ 元気だせ 元気だせ/鳥が 啼いてるよ/聞こえるか 健一

発生から1ヶ月以上を経過しましたが、復興の青写真ができつつあります。明治維新後とも第二次世界大戦後の日本とも違う、全く新しい日本社会が東日本の地できっとこれから築きあげられることでしょう。その一端をあなた達も担っています。“がんばろう 日本!”

1学期がスタートしました。高校生の皆さんは「校長室から」をはじめて目を通したと思います。昨年は毎月1回の割合で中学生に発行していましたが、今年からは高校生にも読んでいただきたいと思っています。読んでご意見等があれば遠慮なく校長室までお越し下さい。いつでも、お待ちしております。